

いにある・少しある」と回答した人が89%を占めていることから、時間の経過とともに被害が重くなり、肝炎感染が自己実現の大きな阻害要因となっていることが示唆された。被害者の人々の主要なニーズは医療体制の整備、原状回復、真相究明、反省・謝罪、再発防止、経済的負担の軽減であり、これら諸問題の解明・解決が急務であるといえる。」

差別・偏見

n=62

■ 差別・偏見を受けた経験がある 25人(40%)

1. 医療機関を受診した時の対応
 - ・「C型肝炎だったら手術の順番は最後ですね」
 - ・歯科で治療を拒否された
2. 職場・学校での人間関係
 - ・感染の不安があるため担当から外して欲しいと要望が出た
 - ・会合に欠席したら「何でも病気のせいにする」
3. 近所付き合い、親戚付き合い
 - ・近所の奥さん達が「肝炎って伝染するんだって」
 - ・歯ブラシを皆が置いている所に置かないようにと言われた
4. その他
 - ・会社の内定を取り消された

9

肝炎感染が他者に知られる不安

n=62

- 感染を知られる不安がある 45人(73%)
 - ・本人が差別や偏見を受ける 31人(69%)
 - ・誰かに話すと皆に知られてしまう 23人(51%)
 - ・周囲が差別や偏見を受ける 21人(47%)
 - ・健康診断で知られてしまう 17人(38%)
 - ・将来の結婚に影響する 12人(27%)
 - ・他者へ感染させてしまう 11人(24%)
 - ・その他(進学・就労への影響等) 15人(33%)

8

(5)文献：安井真希子、片平冽彦、牧野忠康「薬害肝炎訴訟提訴者のニーズと課題—全国被害実態調査から—」第46回日本社会医学会総会、2005年6月、仙台。社会医学研究 第46回日本社会医学会総会講演集、28頁、2005年。

3) 福岡地裁原告調査 (2005年2月)

(1)調査担当者：片平洸彦、安井真希子

(2)調査目的：薬害肝炎の被害実態の解明。

(3)調査方法：福岡地裁提訴の原告11名に予め調査票を配布し、面接が可能な人9名には片平・安井が面接し、記入内容の確認・追記をした。

(4)調査結果の概要：女性8名、男性3名、15歳以上60歳代まで。フィブリノゲン製剤9名(母子感染の男性1名を含む)、第IX因子製剤2名。この面接を中心とした調査からは、薬害肝炎の被害は以下の7点に集約されると考えられた。①医療過程で感染させられた被害②感染に伴う肉体的苦しみ・被害③治療に伴う苦しみ④感染に伴う精神的苦しみ・被害⑤家族への被害⑥偏見・差別による被害⑦健康な・希望に満ちた人生を奪われたことの被害。薬害肝炎の特徴として、時間の経過とともに被害が加重されるということがある。訴訟で被告国と製薬企業の責任が明らかになったことから、これら加害者が、全ての被害者に早急に償いを行うことが強く求められている。

(5)文献：片平洸彦、安井真希子：薬害肝炎福岡原告調査結果概要報告、2006年2月(PCで作成)

4) 薬害肝炎全国原告団・弁護団の調査 (2008年7～8月)

(1)調査担当者：薬害肝炎全国弁護団

(2)調査目的：薬害肝炎の被害実態の解明。

(3)調査方法：2008年6月26日までに提訴した薬害肝炎全国原告団の団員901名を対象に、同年7月中旬頃から被害実態調査票を送付し、8月27日までに回答のあった755名(回答率83.8%)についてまとめた。

(4)調査結果の概要：女性582名(77.1%)、男性173名(22.9%)。フィブリノゲン製剤684名(90.6%)、第IX因子製剤77名(10.2%) [一部重複投与あり]。AC114名(15.1%)、慢性肝炎420名(55.2%)、肝硬変75名(9.9%)、肝がん16名(2.1%)、死亡35名(4.6%)。本件製剤の投与の説明「あり」133名(18.5%)、「なし」584名(81.5%)、肝炎リスクの説明「あり」117名(16.4%)、「なし」595名(83.6%)。肝炎の原因について医師は「血液製剤と説明」48名(8.5%)、「輸血と説明」234名(41.3%)、「原因不明と説明」93名(16.4%)、「説明なし」127名(22.4%)、「その他」64名(11.3%)。

IFN治療と医療費負担については、以下のように記載されている：IFN治療を行ったことがあるのは382名であるが、ウイルスが排除できたのは144名にとどまる。平均の月額治療費は約7万円であり、経済的理由により治療を中断した原告も10名いた。IFN治療中、従前どおり仕事を行えた原告は52名にとどまり、仕事を辞めた(73名)など、仕事上の負担が重いことが裏付けられる。IFN治療を途中で断念した原告も23%程度おり、その半数は副作用(55%)が理由であり、副作用の重さが示されている。副作用の中には間質性肺炎など生命にかかわる重篤なもの、鬱、白血球減少などがある。IFN治療を行っていない原告も多く、その理由としては経済的負担、仕事ができない、副作用の重さが多く、IFN治療を推進するためには経済的負担や仕事上の配慮、副作用があっても継続可能にするための専門医の増員が必要と思われる。なお、負担できる治療費は月額1万円以内とする人が過半数を占めており、治療費の負担が治療の制限になっている現状がある。

肝硬変・肝がんの原告については、以下のように記載されている。：製剤投与から肝硬変までの進展期間の平

均は約 20.1 年、肝がんまでの平均は約 21.4 年という結果であった。治療費は、肝硬変の場合は平均で約 28 万円、肝がんの場合は平均で約 46 万円と高額であった。肝硬変、肝がん患者の有効回答数（56 名）のうち、18%（10 名）が介護が必要な状況にある。肝硬変患者のうち 3 名を除いてフルタイムで働いているものはなく、肝硬変、肝がん患者の就労上の制限は明らかである。肝がんについては半数以上が再発しており、なかには 5 回も再発しているものもいた。ウイルス性の肝がんの再発率の高さが裏付けられている。

差別等については、以下のように記載されている。：病院（特に歯科医）での差別が多く、治療拒否されている事例も多くある。それ以外には職場での差別的対応や発言、就職上での不利益、近所での差別、家族内での差別まで見られる。そのため、原告自身が様々な場面で萎縮しなければならないことも見受けられる。C 型肝炎の感染力が弱いことを周知し、差別解消のための教育等が必要である。特に医療関係者への差別廃止の徹底が必要である。それ以外には、学校（PTA を含む）や美容院での差別、生命保険への加入制限などがある。

(5) 文献：薬害肝炎全国原告団・弁護士「被害実態調査に関する報告書」、2008 年 9 月（PC 作成、本文 8 頁、集計一覧表 4 頁）。同「薬害肝炎の被害実態」2008 年 9 月（PC 作成、本文 18 頁）。

これらの調査の分析から、今年度調査で提言すべきこととして下記の内容を検討している。

- (ア) 「原状回復」は無理としても、悪化を食い止め、少しでも治癒の状態に近づけるための治療研究の推進、有効で安全な肝炎治療法の確立。
- (イ) 医療費の負担軽減・解消：国会に提出されたが店晒しになっている「肝炎対策基本法」（与党）と「特定肝炎対策緊急措置法案」（民主党）の内容についての検討と提言。
- (ウ) 医療体制の整備：肝炎治療専門病院の設置・拡充、肝炎治療ネットワークの整備、検査と治療の連携等。（H I V 医療体制整備の経過から学ぶ）
- (エ) 偏見・差別をなくすための取組み：医療関係者をはじめ、企業・地域・学校等での教育・啓発活動。

(4) 本件以外の血液製剤によるウイルス性肝炎感染被害の実態

[その他の血液製剤については検証中]

図表 2- 40 血液凝固因子製剤の投与実態 (平成 20 年 10 月 17 日時点)

非加熱第Ⅷ因子製剤			非加熱第Ⅸ因子製剤		
	製剤名	投与人数		製剤名	投与人数
1	コンコエイト	78	15	クリスマシン	972
2	プロフィレート	3	16	PPSB-ニチャク	218
3	コンファクト8	4	17	コーナイン (ミドリ十字)	7
4	ヘモフィルS	1	18	コーナイン (カッター)	72
5	ヘモフィルH		19	プロプレックス	29
6	クリオブリン	5	20	ベノビール	
7	コーエイト	6		小計	1,298
8	ハイクリオ	39	加熱第Ⅸ因子製剤		
	小計	136	21	クリスマシンHT	45
加熱第Ⅷ因子製剤			22	PPSB-HT「ニチャク」	177
9	コンコエイトHT	9	23	ノバクトF	
10	コンファクトF	14	24	コーナインHT	14
11	ヘモフィルS-T		25	プロプレックスST	48
12	ヘモフィルH-T			小計	284
13	コーエイトHT	1	その他製剤		
14	ハイクリオHT	1	26	オートプレックス (非加熱)	
	小計	25	27	ファイバ「イムノ」	2
			28	オートプレックス (加熱)	2
				小計	4
単純合計 (重複あり)					1,747
重複投与を除く人数					1,640

出所) 血液凝固因子の納入先医療機関の調査 (厚生労働省、現在も回答を回収中である)

図表 2- 41 報告された症例に係る製剤名、報告製造販売業者名、製剤分類及び症例数

製剤名	報告製造販売業者名	製剤分類	症例数	
コンコエイト-HT	ベネシス	血液凝固第 VIII 因子製剤	9(6)	
ヘモフィル M1000, 250	バクスター		3(3)	
コーエイト	バイエル薬品		1(0)	
コーナイン HT		血液凝固第 IX 因子製剤	1(0)	
プラスマネート・カッター	バイエル薬品	アルブミン製剤	1(1)	
アルブミン・カッター			1(1)	
アルブミン-ヨシトミ他	ベネシス		4(4)	
プラズマプロテインフラクション	大日本住友製薬 バクスター		11(8)	
ブミネート 25%, 5%	バクスター		7(7)	
アルブミン 25% 「バクスター」	CSLベーリング		1(1)	
アルブミン-25%, 5%			4(3)	
ガンマグロブリン-ニチャク	日本製薬		グロブリン製剤	1(1)
グロベニン-I 他				5(4)
破傷風グロブリン-ニチャク				1(1)
HBグロブリン-ニチャク		1(1)		
ヴェノグロブリン-I	ベネシス	2(2)		
ヴェノグロブリン-IH 他		5(5)		
抗 D 人免疫グロブリン-ヨシトミ他		2(2)		
H-B I G		1(1)		
ヘブスブリン-I		1(1)		
静注用ヘブスブリン-IH		1(1)		
ベニロン	化学及血清療法研究所	7(7)		
献血ベニロン-I		4(2)		
ヘパトセーラ		1(0)		
ガンマ・ベニン 2.5g, 500mg, 250mg	CSLベーリング	1(0)		
ガンマ・ベニン P2.5g, 500mg		2(1)		
グロブリン-N	富士レビオ	1(1)		
ポリグロビンN	バイエル薬品	1(1)		
ガンマガード	バクスター	5(5)		
I VGG住友	大日本住友製薬	1(1)		
アンスロビンP	化学及血清療法研究所	アンチトロンビン III 製剤	1(0)	
ハプトグロビン注-ヨシトミ	ベネシス	ハプトグロビン製剤	1(1)	
献血トロンビン-ニチャク	日本製薬	トロンビン製剤	1(0)	
フィブロガミン	CSLベーリング	血液凝固第 XIII 因子製剤	9(4)	
フィブロガミンP			4(4)	
ベリプラストP	CSLベーリング	生体組織接着剤	4(3)	
ベリプラスト			14(13)	
ベリプラストP コンビセット			1(0)	
タココンブ			8(7)	
ボルヒール			化学及血清療法研究所	3(3)
ティシール-デュオ			日本臓器製薬	3(3)
計			135(110)	

注) 0内は、C型肝炎(疑いを含む。)と報告された症例数。

出所) 「企業、医薬食品局が保有していた血漿分画製剤とウイルス性肝炎症例等に関する調査」(厚生労働省、平成20年4月)

参 考 デ ー タ 集

図表 2- 42 年度別フィブリノゲン製造数量 (資料5-9 淀川工場管理課)

年度	LOT 数	合格数
1964 (S39)年	1	539
1965 (S40)年	9	13,135
1966 (S41)年	9	12,387
1967 (S42)年	20	23,692
1968 (S43)年	17	23,603
1969 (S44)年	17	22,410
1970 (S45)年	23	33,115
1971 (S46)年	19	35,581
1972 (S47)年	23	47,384
1973 (S48)年	23	49,742
1974 (S49)年	25	56,323
1975 (S50)年	32	63,046
1976 (S51)年	28	57,619
合計	246	438,576

出所) 三菱ウェルファーマ社報告書 [v] 第4回報告書 (2002(H14)年8月9日)

図表 2- 43 フィブリノゲン製剤数量 (S60.9.4 三菱ウェルファーマ社内部資料)

年度	製造出荷数 <small>バイアル</small>
1976 (S51)年	57,463
1977 (S52)年	88,980
1978 (S53)年	48,491
1979 (S54)年	47,302
1980 (S55)年	63,811
1981 (S56)年	65,290
1982 (S57)年	56,929
1983 (S58)年	74,151
1984 (S59)年	84,462
1985 (S60)年上期	35,802
計	622,681

出所) 三菱ウェルファーマ社報告書 [v] 第4回報告書 (2002(H14)年8月9日)

図表 2- 44 1976~1985年のフィブリノゲン製剤の製造出荷数バイアル、実消化数量、および肝炎報告例数

年度	実消化数量 (バイアル)	肝炎報告例数
1976 (S51)年	66,541	
1977 (S52)年	59,831	2
1978 (S53)年	57,089	

1979 (S54)年	56,526	
1980 (S55)年	57,598	
1981 (S56)年	60,185	
1982 (S57)年	65,806	
1983 (S58)年	72,421	1
1984 (S59)年	71,988	
1985 (S60)年上期	34,836	
合計	602,821	3

出所) 三菱ウェルファーマ社報告書 [v] 第4回報告書 (2002(H14)年8月9日)

図表 2- 45 フィブリノゲン製剤の販売実績

年度	数量(本)
1980 (S55)年	56,150
1981 (S56)年 *1	58,870
1982 (S57)年	65,300
1983 (S58)年	67,800
1984 (S59)年	68,950
1985 (S60)年	73,070
1986 (S61)年	76,500
1987 (S62)年 *2	43,140
1988 (S63)年 *3	11,030
1989 (H1)年	1,900

(*1) 第1回フィブリン糊研究会の開催

(*2) 非加熱製剤の回収

(*3) 乾燥加熱製剤の緊急安全性情報配布

出所) 三菱ウェルファーマ社 (旧ウェルファイド社) 報告書 [k] 肝炎発生数等に関する報告 (2001(H13)年3月26日)

図表 2- 46 フィブリノゲン製剤の生産本数(*1)と納入医療機関数(*2)

製剤 暦年	フィブリノゲン製剤 (非加熱)		フィブリノゲン製剤 (加熱)		フィブリノゲン製剤 (加熱・献血)		フィブリノゲン製剤 (加熱+SD)	
	製造本数	納入機関数	製造本数	納入機関数	製造本数	納入機関数	製造本数	納入機関数
1980 (S55)年	(*3) 49,255	2,775						
1981 (S56)年	64,773	2,682						
1982 (S57)年	57,271	2,684						
1983 (S58)年	79,118	2,721						
1984 (S59)年	90,299	2,718						
1985 (S60)年	63,166	2,577						

1986 (S61)年	84,464	2,579						
1987 (S62)年	26,329	955	54,646	2,167				
1988 (S63)年		7	13,627	1,209				
1989 (H1)年		2	4,554	295				
1990 (H2)年			0	228				
1991 (H3)年			2,066	154				
1992 (H4)年			1,033	143				
1993 (H5)年			2,226	67	1,625	2		
1994 (H6)年				1	824	77	1,135	5
1995 (H7)年				2		8	1,390	61
1996 (H8)年							2,820	52
1997 (H9)年							681	56
1998 (H10)年							1,554	61
1999 (H11)年							2,350	53
2000 (H12)年							2,474	74
計	514,675	6,194	78,152	2,347	2,449	79	12,404	172

(*1) 製造記録より集計

(*2) 代理店からの電算データに基づく。昭和55年以降の全納入医療機関数は、6523軒

(*3) 5月出荷分から

出所) 三菱ウェルファーマ社 (旧ウェルファイド社) 報告書 [k] 肝炎発生数等に関する報告 (2001(H13)年 3月 26日)

図表 2- 47 代理店データに基づくフィブリノゲン製剤の販売数量および納入先医療機関数、販売金額および会社売上高に占める割合

	販売数量 (本)					納入軒数				薬価換算金額 (千円)					売上 比率 (%)
	非加熱	加熱	加熱・ 献血	SD・ 献血	合計	非加熱	加熱	加熱・ 献血	SD・ 献血	非加熱	加熱	加熱・ 献血	SD・ 献血	合計	
1980 (S55)年	56,148				56,148	2,775				315,552				315,552	0.53
1981 (S56)年	58,865				58,865	2,682				330,821				330,821	0.46
1982 (S57)年	65,305				65,305	2,684				367,014				367,014	0.46
1983 (S58)年	67,804				67,804	2,721				381,058				381,058	0.45
1984 (S59)年	68,950				68,950	2,718				387,499				387,499	0.49
1985 (S60)年	73,070				73,070	2,577				410,653				410,653	0.52
1986 (S61)年	76,482				76,482	2,579				429,829				429,829	0.54
1987 (S62)年	-7,604	50,746			43,142	955	21,657			-42,734	285,193			242,458	0.32
1988 (S63)年	-137	11,163			11,026	7(*)	1,209			-770	62,736			61,966	0.08
1989 (H1)年	-27	1,926			1,899	2(*)	295			-156	11,115			10,959	0.01
1990 (H2)年		1,922			1,922		228				11,092			11,092	0.02
1991 (H3)年		2,334			2,334		154				13,470			13,470	0.01
1992 (H4)年		1,607			1,607		143				9,274			9,274	0.01
1993 (H5)年		865	404		1,269		67	2			4,992	2,331		7,323	0.01
1994 (H6)年		21(*)	912	34	967		1(*)	77	5		121(*)	5,263	196	5,581	0.01
1995 (H7)年		5(*)	10(*)	1,383	1,398		2(*)	8(*)	61		29(*)	58(*)	7,981	8,068	0.01
1996 (H8)年				1,591	1,591				52				9,182	9,182	0.01
1997 (H9)年				1,495	1,495				56				8,795	8,795	0.01
1998 (H10)年				2,548	2,548				61				14,990	14,990	0.01
1999 (H11)年				1,453	1,453				53				8,548	8,548	0.01
2000 (H12)年				2,045	2,045				74				11,753	11,753	0.01
2001 (H13)年				2,264	2,264				70				13,011	13,011	0.01
合計	458,856	70,589	1,326	12,813	543,584	6,194	2,347	79	188	2,578,767	398,021	7,652	74,456	3,058,896	0.15

(*) 代理店での品番入力ミスによるノイズと思われる

(注1) 数量、納入先軒数は、旧三菱ウェルファーマの販売データではなく、代理店と医療機関等との取引データに基づく数値である

(注2) 販売金額に関しては、販売数量にその時点の薬価をかけて算出した

(注3) 代理店データに基づく数値であるため、データの信頼性についての検証は行われていない

出所) 三菱ウェルファーマ社報告書 [t] 第2回報告書報告書 (2002(H14)年5月31日)